

3111



漂客談奇

門 九 2
號 3161
卷

漂客談奇序

上着短衣下穿禪者緊襪束身表更加野
衣戴纏笠踏皮履知是恭西人蓋有漂客
歸自米利幹者一時喧傳見者如堵余適
病不得見吉田子永因以寄余其衣服之
容大凡如茲矣余按地球泰西與米利幹
東西雖隔懸風尚畧同豈以米利幹之地
為恭西人所割掬乎子永又次弟其漂寓
事實成小冊子明白簡盡一覽可了索序
余嘗聞大南海中有慈石為暗礁舶或近



之鐵釘皆所喻拔俄項壘粉書中亦載之今
航海日廣全地球中莫不經歷而南極下北
洋如不可測乃漂客所語耶吾刈僻遠無
研覈西書者而漂客已辨朱利幹語又習
其文字足以審彼之情而補己之不足是
書之著何德詒奇吉田秋序

漂客詒奇

才一談

從來異域小漂流以了以度時氣往來似國
五川類字從浦漢人傳流才在藩門回必暢多
中し漢百次解之人長傍し以幸所しおる之
以詮識漢にお成し舟の國に遊るは屋敷に居る
西漢の多しお尋は難き答よおるしは更たの也し

一 和文之入在元天保十二年辛丑正月十日傳流才幸助同所

寅右衛門丸船合五人中合明らりて又五人し漁船に
白米を汁余用意にせり日中り時るや代浦出帆して
十四五里下の方より津の沖とんと申すよおきては縄と
申物より縄を釣ひて又獲物とて又下し方八十の俣と
申すよ候とあらしそ扱を明し申すよ百代候此
沖より申すよ一漢子に仕ゆれ又獲物とて井田に
白米と申すよ申すよ申すよ申すよ七日の曉方候此
乃申すよ五里沖に申すよ一漢子に仕ゆ申すよ

爾ら風吹起し申す地方五里計申すよ申すよ申すよ
系より申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ
午の刻過小なる時申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ
お成り申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ
廿人と仕ゆ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ
カと申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ
風をよし申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ
お成り申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ申すよ

らく橋の申と云ふ下り心をなすべしと云ふと
流の急を甘みと云ふ一河凍え居るくみ只神仏を
祈念はめさく船にお成り又船を流す一杖を
おく利風は去く詮方あり大小此帆板を明座を
横に結ひ舟を後ら懸極し用意は風は但せ流中の地方に
心は運よんぬ得たりとも漂流は流す心も是を放
九日のはち冬用意の舟拂底は釣柄は度ゆ美と云ふ
帆と凌ぎ申す十日の八段出づる氣を小く云ふ

を焼燻うみと云ふ流す舟をいひ突と云ふは
いふよ帆あうり日も暮れぬけ十三日お來り
來適と云ふと云ふ舟も多しと云ふ舟は舟中ゆき
船後九郎といふ舟は居ると云ふ舟は彼舟小いゆり
必勝ありと云ふ一河あらハ流つうせ流すと神佛祈念
そこの夕暮に流し流すと云ふ舟は二ツの舟は舟を
おきとも風波烈き舟も彼舟も是を舟は舟なる
舟と云ふ舟は舟と云ふ舟は舟と云ふ舟は舟と云ふ

無人鳴
漂着す

波を縄をとりし物とて多しゆき多し物丸をた
聖十日にお来り同懐念にや一候つふある一切船板を
とてく漕舟なるを破るはるふ事なる船板破れ
馬小破に飛揚りてええに破れを掃き舟中し續て船
破に揚出れば人れはへりて多しゆき多しゆき
篠の敷を茂るのよめてゆくとお来り中室のしこ
ん包ゆき東の方とお来りぬ破に洞穴をくはるは船
の支とお来りて後九郎と申多しゆき一居ゆとゆき

打殺ししきも給ゆはも随分腹を巻ふる手取頭
乞とうち殺し後舟に舟を忘の百とて流來ゆと
氣お船破れ破の破波の打し桶つとて丸漏れを
流來ゆと受け船に舟を投死せんと存ゆ時
又思ひしきも多しゆき多しゆきとて目を送るは
是れ氣候にお来り時分の後九郎流來ゆとて
之をいしきも飛出ゆ感日にお來り万次郎打連破り
相あらし候退を推奉三丁登りて方一里計に船を

後九席わく一本てよる又瘦妻(只)主助(以)着(病)れ(い)ま(宗)若(魚)
万治郎三人を見てもわつと破れおとれ日(一)回(れ)食(物)と(と)の(一)
中(比)も(と)や(六)月(と)お(足)え(の)時(分)三(百)月(と)拜(み)て(言)計(後)の
曉(又)た(の)之(又)南(北)故(も)て(帆)船(一)艘(辰)巳(の)方(か)来(り)と(見)法(者)
い(ろ)お(る)船(を)と(う)ん(や)と(い)お(る)又(次)お(る)と(言)お(る)此(れ)も(大)お(る)果(必)船
少(く)出(對)し(而)く(夢)を(お)け(破)換(は)船(竿)等(又)新(款)と(い)ふ(所)

吳船を見せ
す

吾(松)子(漂)流(人)を(し)神(と)う(ん)懸(せ)し(比)お(る)彼(船)を(小)船(艘)
お(る)一(舟)よ(り)の(漕)舟(を)お(る)之(を)以(て)括(ふ)と(致)書(人)小(松)以
是(よ)り(と)も(吾)松(子)破(と)く(お)來(比)お(る)荒(波)を(て)船(を)付(け)い(お)
わ(く)船(よ)り(を)新(款)と(い)は(を)付(け)遊(舟)來(遊)と(い)ふ(所)ノ(子)ま(あ)字
以(て)一(比)見(列)や(中)人(の)氣(お)あ(し)く(存)出(海)に(り)と(居)る(色)を
物(お)ら(想)う(る)の(比)お(る)彼(人)の(子)松(の)や(一)船(に)遊(び)付(け)出(海)今
卯(を)連(て)き(て)一(比)と(い)ふ(所)松(子)ま(あ)字(致)出(海)穴(方)を(括)け(り)
之(文)海(舟)の(故)も(古)似(は)出(海)と(卯)一(艘)の(舟)を(お)も(て)今(を)せ

洞窟の方(溝)の中(山)の時(竹)を(洞)の中(を)主(助)う
者(病)し(一)石(を)取(り)不(斗)洞(と)鶴(の)尾(目)と(壺)を(有)
根(の)石(の)来(り)行(う)中(一)竹(を)引(出)さ(う)ん(と)結(ひ)止(ま)る(根)也(ま)も
了(ゆ)き(又)石(を)取(り)人(和)三(人)も(船)小(宗)比(根)中(括)以(一)山(石)
丈(小)随(ひ)舟(よ)の(中)中(山)を(助)を(彼)思(き)ま(の)に(扶)け(ら)せ(舟)
了(ゆ)き(則)二(艘)も(大)船(を)漕(付)と(了)ゆ(き)又(大)テ(三)十(百)幅(方)計(り)
帆(板)三(本)速(り)之(船)多(く)矣(人)三(十)余(人)宗(比)在(山)が(船)も
丁(卒)亦(り)扱(み)多(く)某(并)箇(独)の(石)敷(一)板(マ)世(其)後(根)又(抱)

異船の故

頭(ア)の(彼)人(又)將(よ)海(を)重(を)る(物)を(各)一(部)と(尸)根(有)る
も(ま)秘(し)し(一)山(石)を(敷)海(を)重(り)る(者)も(山)船(は)山(石)又(山)船(と
下(一)馬(の)人(と)の(舟)竹(を)漕(付)石(敷)と(乳)入(を)と(又)尸(根)
三(日)経(日)と(經)ゆ(き)も(燒)芋(豚)也(一)物(と)わ(り)て(ま)る(一)船(又
給(ゆ)を(大)山(割)一(中)山(石)を(飢)あ(り)む(の)俄(小)大(食)を(見)六
死(無)と(中)る(一)山(石)の(後)も(取)り(ゆ)き(一)船(也)
鴨(小)漕(よ)せ(ゆ)る(も)初(が)漂(流)人(を)と(一)知(り)以(後)美(魚)
る(れ)を(先)系(ゆ)か(又)人(う)け(と)ん(う)け(お)助(は)越(物)無(船)

重助後を「リヨ」チ方ニ在ルニ其年より病氣
 再發は「リヨ」チ世話を以て濟しう三里計を方
 「リヨ」ト云ふニ其百住テツハシト云人の方と宿住
 よ子、醫師あはて是養生は此地を其疾を病疾の極
 にお来未し四月終に病死は此に云ふ「リヨ」ハカレ
 僧神七人あり此の葬或お教ゆ其地極の如し
 よみ葬母尸は此の風俗は精と也法を其地と云ふ
 此の地人持を以て精とも養生未も此の地は其地

「ツワナレ」と尸人の葬は月之終りに此の地を以て其の極極
 月ニカケツリレと尸人「ハナ」口濟しう巡見とて其地
 系し「ツワナレ」此の地を以て其地を以て其地を以て其地
 其方亦此の地を以て其地を以て其地を以て其地を以て其地
 他は其地を以て其地を以て其地を以て其地を以て其地
 ツワナレと云ふは其地を以て其地を以て其地を以て其地
 田地死分は此の地を以て其地を以て其地を以て其地
 の地を以て其地を以て其地を以て其地を以て其地

不中且村役人御し知し人別改をこそ并ふは
者も御残つて役人の受出は他法に比れは是れ
沙汰も不致及他物も皆平に敷く随分よく出来
納りもして字代浦まで相突を納りて御納り獲
人れ耳目と驚くし中は是れと云はれ矣希にこそ
持お賣ふと江光院と送り在る内も右の御納り
にハレカ方はお座敷系店に御納りしヨレと云はれ
振あつてもはなれそ那集の中よりゴア一と云はれ

そ方ハ此方と云ん意も是れやといふ事と云ふは
コウリヨブイキセルしあはれは御しつて是れ
ゆめのと云ふおれ礼謝と申す御納り病死の事と云
ゆめ御納り愁歎の御納り我等其水邊に御納り
コレと云ふものは御納りとは是れ日本と云ふ事
ゆめを便知といふ日本に送る御納り一丁と云ふ
ゆめを御納りしと云ふ御納り一丁御納りも御納り
扱ふて是れゆめを御納りしと云ふ御納り一丁御納り

波渡多^ニ来^リ又^モ本店と^シんる^一肩と^舞店^をる^る
傳就^ク乳出^ハ桶と^腰舞^ルて^踊る^るお毛^ハ風流^ナる^る民
伝店^ト打^テ笑^ハい^テ是^レ其^ノ音^方と^表舞^傳就^ル乳^舞
先^々右^邊つ^こう^いし^を中^ハ右^邊の^聲子^ハあ^らハ^後有^る
谷^中の^船も^明日^ハ十^口の^湊一^二系^とく^銀淺^二枚^上一^兵
立^出の^羽立^目ま^の川^右邊^ハい^とり^湊の^系小^カ又^フイ^千セル
お^色子^ヲ神^メて^ハ日^中に^舞る^る屋^々は^は是^レあ^らは^はる^る
古^江の^船え^れ一^とと^右邊^の衣^履先^方の^分式^箱是^者

帰國の便船

積^入の^船と^大子^候い^はな^るを^あと^も又^ハ十^口の^船右^邊の^船
對^面の^船の^船是^レ人^々の^船を^候お^別進^出此
如^クタリ^ヨ一^千と^ハ候^別物^等の^由ら^の積^上の^船は^フイ^千
セル^船を^キカ^レフ^コ一^千は^先方^のの^船を^候お^別進^出
富^右邊^の船^もフ^イ千^{セル}船^を候^別船^を候^別進^出
是^レは^先方^の船^中に^候船^を候^別進^出人^々の^船を^候お^別進^出
い^はな^る今^もつ^らく^は先^方の^船を^候お^別進^出上^陸は^先方^の
は^船を^候お^別進^出一^千と^ハ候^別進^出一^千と^ハ候^別進^出

一口に家帆は是より船過より更なる鯨漁の事也
三月は八上船過の糸の帆風所を列を打懸て東へ
去る北に轉り船夫の地を以て用ヤレゴニコニコト出せ
家八日中支那地ニツマコト云ふ是より更なる下
山此水もこゝに船を居中山初も毎火を焼成る事有
神子人の山は舟船を以て一人の山の中にもヤレゴニコ
コレは是れを以て上陸仕るべく言ふ山取の事也
人八日山中山餘り無き是より更なる海に下りて

松前 3 着

秋を考ふ

函にキヤレフニコニコ函知ふ仕人も亦キヤレフ
取急ありは又く便を以て言ふ先船を居りて中
そ急に隨ひ又く船仕東に去りて更なる鯨漁日の光を
見たりと云ふ日計也南に去りて十月は山に上り
船帆仕ルキヤレフニコニココレは氣を以て船を以て又
よき便ありと云ふ節送て中とてお別れ見也上陸仕ル
万太郎船も並米利韓ツイ千セ几宅ありぬ事あり
は及同由テズと云ふ人々お船餘り余り泊り港に

おりよ一 1 着

万太郎 1 着

四人相令
帰国を満す

吾帆兄也、以、上陸、石、内、山、舟、中、尋、來、之、一、
ふ、と、ま、て、對、面、仕、は、交、の、り、新、結、つ、ふ、や、テ、ズ、お、帆、を、
早、く、お、別、れ、申、山、物、又、う、の、マ、ダ、タ、リ、ヨ、一、也、細、し、後、中、
由、又、く、そ、世、話、と、い、ハ、十、口、の、湊、よ、る、と、又、里、計、隔、山、ハ、ウ、リ、
と、云、云、と、糸、下、り、ん、寺、有、る、艘、目、座、仕、は、在、山、を、成、年、九、月、
ハ、十、口、此、湊、よ、る、と、百、次、郎、傳、を、い、い、は、越、山、舟、子、速、此、越、
對、面、仕、は、又、帰、航、の、志、を、く、趣、め、く、宣、右、馬、の、口、を、
四人お集お後仕は百次郎をアメリカにて地理測量此

百次郎

法、亦、と、お、智、い、餘、航、小、宗、ア、弟、由、を、教、法、い、ふ、い、越、中、を、
海、航、便、航、し、我、島、を、し、る、の、中、ハ、百、口、は、交、約、語、仕、は、
初、百、次、郎、烏、王、府、ハ、十、口、此、湊、め、く、傳、説、等、に、入、お、已、う、是、
ウ、リ、ヨ、レ、フ、イ、十、セ、ル、子、流、い、南、島、を、出、一、ヨ、キ、シ、メ、ク、ロ、と、ハ、傳、説、
を、恐、け、流、る、の、仕、且、馬、を、突、中、山、は、急、を、採、得、と、ハ、山、
は、崎、止、ま、ハ、あ、ら、び、平、比、め、く、橋、の、極、小、う、ん、の、拍、を、皆、擲、ま、
本、多、く、海、人、を、突、と、た、食、仕、は、五、穀、を、不、及、中、水、も、無、し、
椰子、此、中、よ、る、こ、の、け、を、吸、山、中、衣、類、も、無、し、男、女、皆、裸、を、

あまの志新事此英吉利のやうな法をアキリスるを其の
星をくしはばあふ日斗滞留新水と烟へ取已む事出

南アメリカ火地此岬を曰ふと北に去るは羽之来卯の日月は

小アメリカマセウサーツ西此内サアヘーグニと云漢小島航

法はばあふイ千セル住居此を此法并局するを内法病死

以ては其を考ふ又ヨウカと云故あはる其の對面とて

此城の中万波所を和名アレンと云人の娘千アレと云

如師通におれ此を此家より横文字筆例おれ其の

一日此中絶居

マサウセツツ
りく

甲午日斗はファイ千セル後事を取らつて速由に漢を西計

隔山ニカレト子ツキと云事ありて田島実求門後此の海術

系其後彼よりして傳は此を此受同年十月廿ハアツレと云

人能受るを千萬此地理測量此法等首をい初此舟入

門は羽之来居く日月ありて此所は同年七月ファイ千セル

又録此にお中此の夜を千ヨシミンレよ留るを新居とて

る事ありて此中射ファイ千セル事とて妙とて其人妻く

娘とて此人骨肉同根にお養此を此

千ヨシミン年万波所とて其
ファイ千セル舟其の爲に

一日此中絶居
マサウセツツ
りく

十月はまゝ「アルバ」に云人あ、件、同様、存方、お初、生、舟、又

14化二年

入門は、お之、年、巳、の、月、^正、修、引、は、此、物、フ、イ、千、セ、ル、に、帰、り、る、ま、

甘ア、ト、ブ、ン、の、系、桶、屋、の、者、子、に、お、来、り、ま、す、病、氣、氣、を、其、の、付

又、ニ、カ、ン、ト、子、ツ、キ、レ、よ、ま、さ、ま、の、フ、イ、千、セ、ル、宅、に、之、座、の、者、算、術

14化三年

等、お、智、能、を、相、之、年、^末、又、右、桶、屋、の、方、に、お、成、す、二、月、テ、ス

と、中、人、よ、は、お、座、鯨、船、の、系、同、所、お、帆、西、洋、の、方、東、よ、り

系、お、一、^ノ、ウ、エ、シ、ト、ア、イ、ラ、シ、レ、と、中、に、お、帆、は、新、水、お、洞、カ、十

リ、ヤ、の、湊、を、と、を、を、南、の、系、舟、を、陣、を、と、包、り、ア、ン、タ、シ、と、云

船、お、ま、く、飛、を、お、又、此、の、方、に、系、^一、シ、ヤ、ワ、レ、の、湊、を、船、

タイ、モ、ウ、の、内、コ、ウ、ヒ、ヤ、ン、と、云、船、よ、お、帆、は、船、の、心、を、い、お、れ

人、お、皆、思、シ、ボ、ウ、も、て、出、座、^二、年、日、斗、滞、留、新、水、と、洞、

成、矣、と、云、お、^一、東、に、將、^一、新、ゴ、イ、子、ヤ、の、お、海、を、船、を

船、中、に、い、お、れ、船、人、も、又、是、坊、お、て、船、小、粉、を、其、の、城、を

向、く、お、り、男、女、も、ら、お、難、く、思、お、決、つ、こ、出、座、の、是、と、人、喰、酒

と、喝、中、の、本、に、用、紙、も、存、方、中、の、系、宜、お、成、お、ま、す、此、座、の

14化四年

未、の、年、二、月、又、キ、コ、ー、^一、^二、年、日、斗、滞、留、新、水、と

重印新瓦

傳説より正の
譯用

丸入戌亥の方へ向ふと云々此方「リウキウ」へ是船之腰定
まゝの傳本海之夏進並是夕日本此南と東と録徳一
地方より半里計のちみして日本此船をとりて船寄岸
板の神巻をとり彼人より揚りしはたをり叩きし土俗の
苗山外とお尋ね方此船をとちゆきとせんとて中へ
東北のより南へ轉り十月初ウツホ一と云帆を助を脱こ
病死しし傳説又右船もゆき仕宣右船の揚りしはたをり
尋ねしと云ふと云て對面仕ゆきと云ふと云ふ子おぬおぬし

傳説より正の
譯用

重方より云々此人毛は度ゆ電洋船中人此船と云は
は夜入津し船日本人來來ゆきし子舟子遊小舟の
波船來ゆき傳説又右船の揚りしはたをりと云て對面仕ゆき
と云て便船ゆきしはたをりしと云ふ本意と云ふ事又
け渡りゆき船日てん又常帆子舟ありおぬの遊はた
と云録徳一戌亥の常羽之年申ノ二月又キユ一と云
十日計洋船新水と云丸入ゆき又船之俄に船氣は深
來しと云と打殺し感をも人子絶りて又女を抱し板の

今より西年かの小亜米利幹と「メキシコ」と異論を以て終り
合戦よ及のそ節水車を仕掛ゆとく川原と堀の沙金を
夥あつんおし討るる事こそそのら強必の觸をと牛術の
令法と一堀丸派の渡取をよるも今令心にお氣西洋東洋
家と從來とは必も各所にお本船よ全移十月冥帆同月
東よりウホーの八十口は悉く於是の船の志定て陸の如
實右處の子討面つるし必も傳説を右處も所を又子居す
五里計隔のウリこと云々又も百姓日度以て一五里計隔

八十口と傳説

人と雇ひぬを考へて又早速其越へ人お集めぬの約諾法
け時万治郎湊口より西米利幹船入候事日本人宗組
來山越へ承り官憲子系討面仕ゆ事日本人お誓ふは得た
双方之語を不中傳説實右處の子討法を致交候
所名傳説の中此色ゆ事又別討面仕ゆてよくお分山能人
日本紀傳より高村峯柱船天秀丸船及富右衛門者少
十三人といふ江戸教出帆しりし事又風波よ漂ひし船よ
女抱おぬぬ事右十三人の内八人を魯西^{オロ}西^ヤ日夕ラシと

口前二合

宮中より帰国
七廿日

しん湊より在りて越えり只五人のしん湊に在りて人よとをよ
ゆ乾の約束に在りて教ふまはるゝ富たあつ一人今もあつてあつこ
居るや中交名中をよ射せりし中諭出はるゝ取知に在りて
洲邊に在りて残るゝ百次郎の亜米利幹鯨船に便と教ふ
九人上船に在りて船は是れをよ射せり又はあつて居るは
船に在りて名少く人少くをよ射せり石江に在りて船中
船中し人と船意遠く候出はるゝ舟紀加人五人を何卒
日本に送是れ船におれり云々舟紀加人五人を何卒
日本に送是れ船におれり云々舟紀加人五人を何卒

船中し人
と船意遠く
候出はるゝ
舟紀加人
五人を何卒
日本に送
是れ船に
おれり云々

船中し人
と船意遠く
候出はるゝ
舟紀加人
五人を何卒
日本に送
是れ船に
おれり云々

是より先傳説を八古に湊めて日本人吾助と申考こ
兼今に在りて人物を在りて漂流しつらうに
船の人と抱ふ候に在りて便に在りて船のよう
船に在りて在りて云々人此候章をつけ令致
多るを在りて云々人此候章をつけ令致
候所より云々人此候章をつけ令致
叶万子細と云々細中來り吾助も氣に毒も今
己より申しに在りて脱れ候に在りて船に在りて

百地印の琉球
信の玉

よりの取らぬ物三人上陸写もふく又又小亜米利幹をこと
よふ此船をフイツモアつと中人入津は此船の貿易と
して清の海峽北越舟万次郎アメリカより持来り
金子といふ船が船賃入目本を思ひ出さるる金子は清の
一市に在りは此船を積入三人乗船後お出帆西の方へ
亥年正月琉球沖に雲斗の刻をいふ船とありて大船
地方は清の舟中の初万次郎ウワホーお帆の舟を便
といふ由米利幹フイツセル方へお帆をいふよき便とい

取らぬ物三人上陸写もふく又又小亜米利幹をこと
よふ此船をフイツモアつと中人入津は此船の貿易と
して清の海峽北越舟万次郎アメリカより持来り
金子といふ船が船賃入目本を思ひ出さるる金子は清の
一市に在りは此船を積入三人乗船後お出帆西の方へ
亥年正月琉球沖に雲斗の刻をいふ船とありて大船
地方は清の舟中の初万次郎ウワホーお帆の舟を便
といふ由米利幹フイツセル方へお帆をいふよき便とい
ぬらぬ物三人上陸写もふく又又小亜米利幹をこと
よふ此船をフイツモアつと中人入津は此船の貿易と
して清の海峽北越舟万次郎アメリカより持来り
金子といふ船が船賃入目本を思ひ出さるる金子は清の
一市に在りは此船を積入三人乗船後お出帆西の方へ
亥年正月琉球沖に雲斗の刻をいふ船とありて大船
地方は清の舟中の初万次郎ウワホーお帆の舟を便
といふ由米利幹フイツセル方へお帆をいふよき便とい



薩州山川記
善好子

と申すより、洞、子領薩州、横出、及人、出立、合出、味、之、
丁亭、出、扱、子、其、立、中、粟、登、酒、寺、計、改、帳、志、和、割、
給、事、也、の、第、上、第、之、取、り、ま、け、下、一、端、又、同、七、月、上、船、同、所、
右、帆、同、月、中、旬、薩、州、山、川、湊、上、忌、名、羽、之、日、麻、兜、崎、出、城、下、に
張、石、出、下、屋、敷、と、申、す、に、其、長、屋、並、出、付、出、及、人、寺、人、平、出、及、人、
出、是、夜、等、番、之、為、附、又、羽、織、綿、入、糸、物、綿、律、帷、子、表、取、
洋、紙、張、作、付、出、及、人、中、上、之、也、煙、草、每、紙、數、洋、領、上、九、月、
十八、日、麻、兜、崎、上、船、出、作、付、同、廿、九、日、長、崎、下、忌、名、羽、之、月、

長崎書

親、目、より、出、奉、引、所、白、洲、お、わ、り、毎、々、出、味、之、也、切、支、丹、
画、跡、仕、揚、屋、入、也、作、付、其、立、子、之、年、之、月、廿、三、日、出、所、
お、わ、り、出、立、舟、出、濱、等、之、也、白、紙、一、枚、長、板、一、枚、中、紙、等、在、
傘、を、取、り、洋、紙、万、次、郎、持、来、之、妙、合、紙、并、錦、測、量、の、
筈、一、つ、横、之、字、七、筋、十、二、冊、大、半、仕、懸、紙、地、一、枚、信、紙、地、一、枚、并、
玉、葉、等、也、右、上、合、紙、を、出、毎、用、之、合、之、出、門、替、也、作、付、
出、立、出、及、人、出、渡、り、之、出、立、舟、之、邊、を、以、諫、可、也、下、之、實、を、地、
之、七、月、廿、三、日、出、城、下、之、忌、日、之、出、立、味、也、作、付、持、来、銅、板、

高知書

地景七枚出多事並白後海之漁子古居為年々高くに
米寺人持持り洋紙紙 作舟出者水江渡也

漂客後奇

第二候

傳説等漂流ウワホー上等船万次郎アタリカ

上等航流此流活お海ま(彼地の風ちをお尋ゆ)

答子及ゆりや丸

一 鳥王^ウ府^ホ本地人^ト物^ト 亜細^ア亞^シ子^ア矣^ア不^レ中^ル凡^ソ七^ツ羽^トを^シ

ヤキウワホー一をナイ一をワイ一をモロへ

一をアトワイ一をモロイ一をモワイとヤキ

七出

いかなる所にも得ず人來すは此處に府をウワホー
の内「ハナロ」とテ湊ありくと朱に極の船に載せ女可
もろくし萬玉船入津絶へずハ七海也云ふは合漢に新板
そ六万枚を此地の王キニカケヨリの新領にお來半分を板
をハアメリカより來居ゆを以て神此人知フタリヨシキ不
所成比社人ハもと送葉を以てハ海に來りて多く人を救ひ
おのつうしを以て極にお成れを以て海をさるべき航
の途にハ此處に百西米利幹へ宛らんと致し居る英吉利

英吉利
船

より好け英吉利の船人と致し得る伊斯波示那の好け
何方にも属をりしお成不中なり此地の船を云ふは
官を合セ用中ハ

一七海を云ふハ百の地は此處に得ず不致を生ずハ此
萬葉と歎と化すハ此の事ナリ新板に合漢を云ふ萬玉
入津之船より此の文意以てハ常食を云ふハ新
所謂ハ此の事歎と致し本海歎とハ筒神は此
波是米利幹の風より此處に男子を救ふを打らる

石は山嶽と申すも、麦も米も金輪れ持持し
丸き糸もてくみ中

一 衣類も古鏡の色西洋風の筒袖もて大神の御衣を以
はる中の髪を結みこり、あや焼金とて錫を焼
き、いとまうせ糸を以て西洋の御衣もてはなれ
呂宋よりの後アムゴ子うと云ふこころ板のおとむり
編みも心立と云ふ、徒来法

一 如れ衣類も筒袖もて、昔より、かつ干襪を、そとを

女風俗

もを解り、帯のきと、敷り、アムゴを袴、れ、く、廣く
お束、逢半、徒来、れ、時、も、大、き、あ、る、風、呂、宋、の、女、子、の、御、衣、
れ、角、と、折、後、ろ、よ、り、と、そ、よ、あ、ら、け、あ、み、く、ち、う、之、針、と、以、て
糸、いと、先、き、と、是、徒、来、法、男、れ、き、と、ハ、風、遠、も、て、は、半、
さ、き、物、も、男、女、同、く、半、と、以、刺、糸、を、も、履、も、て、は、な、い、

三つ

一 せ、せ、せ、一、つ、湊、も、糸、玉、の、糸、の、轆、湊、れ、あ、み、て、甚、難、事、
は、履、の、地、女、町、ん、せ、物、を、あ、み、て、甚、あ、ま、い、あ、は、な、れ、三、重、糸、
此、入、海、南、を、タ、ー、べ、ッ、ボ、ー、と、ヤ、ウ、と、サ、ア、ヘ、ー、グ、ン、と、ヤ、

教化

六月日宣く大和を治まよるの政治におぬり申因て右例
とんて極つてしん

一 毎月寺院極のおまをて、土系此法令を續ゆせ申し
親を敬ふ所一人を申らやむるうし人此書を抱を
抱うし盗以きをを起うし此あと申るめり此社以是り
宵平たる股河平志を必捕らば眾人にお來申し

徳政

一 眾人を皆大にふる困の内は就を速るしゆ申す申く
教量そ人々の得多むをたれを以て修むと教をせ

眾人に極まよる申年限といく教を申す申織物敷履
おと眾人に極ぬるはたぬ

後殺

一 人を殺ゆそのハ死刑に似い申極を立板のふ示のせ
室も四封文ぶみ下々の檢を極すゆはを眾人より
後ゆり首をとめり死ゆ申及んを不仕

一 よきいりを仕ゆその人々を登らまぬるも上るを極
おど貫ひゆ極のるし一向及取不申し

一般の俗

一 米利幹人細およる老よ至おて男女とも姿をとうえ申

名とよむ元後ふと云ふの無くは男を焼燬せしむ
 如き髪を耳のおらふや又あをよけ後ろよむ
 と先所を大人お覽れ元後仕立よ大小五しゆの遠中
 一 婚禮を伴人と申も無出所の男女互に文庭ふといお別
 時を親之法中合をいへと族おも亦誅仕る院極の
 屋出山ゆを夫婦にお出比若れ者といわ一は夫婦
 我をちり石我の人得るを屋うしをる名中少別中屋
 お成夫婦の名を掛れお記並夫より夫婦無親類お違

茶を御し受は保養系より受は内にお来申
 一 葬し受天城日本子回一お校中おや先地は地中
 お家神の人来ゆを經を讀ゆ極のりも法能人坊よりハ
 無出所の妻も出所の
 一 死者を人を祭ゆるの部て無出所の養ふハ中を立並け
 弟をれおゆものも出所の膝忘と申るも無出所の
 一 文字を横文字二千六百としゆるありの字を通用はゆの羽と
 以てうま中の画とうまの時を字と用ひ申

一 算用の理日本の算と同じ算盤を大なる者七尺横

八寸耳此焼石の薄盤に木を以て底をとり丸くして

釘に如きものより字を彫り算用結指を以て指す

字を大滑くえ丸く板におかす此は流の色也

一 曆日と西西洋風より定月を以て去三月去三月去三月

去三月去三日去一月も去一月も去一月も去一月も

去八月の時も出る此の年中と三百六十日定分て刻り出度此

月此魚廊より八時より九時止の時刻を一日十二時を刻り

時此持鐘も出度

一 錢を銅錢銀金銅を以て此銀錢は少く銅錢は枚多し

銀錢は大きき小計十六枚に當り金銅の銀錢の大は十枚に

當り用毎は此の玉の指此の首物も皆銀を以て交易此大小

耕作も多し之を以て割合を以て較る納也

一 家此を西洋風より多し隙子類皆ヒドロを以て割る

二階之階も多し此日本家此の板子屈曲を以て中の内交り實

必賤す又此座の^上壁の焼石あり赤白 出度此瓦を

ろをよき刺糸他は色をいへば板にうら糸と交す
腰をよき糸をいへ

一 急織まゝ大神硝子を以て刺糸一は度は切替打も
硝子よりくは度は固を杖を官を仕切本より他
三天汁の麻をこし牛子縄の根あるものを幾筋も引
渡一は度はうら糸は紗類本海糸のふまきと交す中は

漂客決奇

第三巻

烏王府小米利幹風土畧お尋ね種くすな好

此は春日日着もお糸は付糸くお尋ねれり百次郎答
及ゆき丸のや

女風俗

一 女織と申て括別をききし家の衣類を仕立あといふ
糸を右糸と申も紅粉を色付糸端つういと髪と扱付糸
あては度は眉目の置きもの多き糸は度は熱く種疾

遊

江の国あそびのこころをいふ

一 拙所の波振松別日本こころをいふ

旅人此方先とおらん中いあとのと実の時を必病と云ふ

せしむるよ

酒

一 酒を飲ぶるこころも苗地此人を熱く酔ふるを嫌ふ
とら多しハ終く不中い

阿片煙

一 鴉片煙草別く嫌ひし漬はあそ中夜漬必都児
松人もハ吸ひをたふらんけ中い

楽

一 心やと中琴バシキヨウと三味線せんこと中胡弓松あめ
此度公流り唄も此度公

一 今あ坂よりと云う来々をよむハ涙を假し

一 船音よ流るる波あは流うた先和のそりまわ

おとよ法を唄ひ中い

船

一 舟に色をて歐羅巴製衣よ假ひゆる中を矢よ此後を假
松別遠い不中い大船を大流を三つあそびあは流るる音假此
と此中をよむ中い

洋車

一 陸北運送馬も用いしは、
大抵山を越せぬ程は、
五十人ほどの力と、
おれぬと、
おれぬと、
おれぬと、

捕鯨

一 洋中よあるく鯨を捕らむは、
少くも二艘あり、
鯨は、
鯨は、
鯨は、

朱紅

一 筒切に仕組中此大釜を以て、
七年の朱紅幹ホースト、
入候、
此物、

水山

一 南アメリカ南の岬と、
八百里用、

磁石

一 南洋中磁石の磁石、

船の針よむ遊抜ゆりつと水は洋中針の指ひ出さるる
出度也

一 東紅海水の名赤くハ赤出せし海底の砂悉く紅まらる
一 西よ赤くおん中地之西紅海黒海を同地と云ふ

米國語

一 米利幹あり天をへブシとアル地をガチア日シヤア月ア
西ウエシツ南シヤウス北ナウス乾ノチヘン坤シヤウトス良ノヒス
トス契シヤウイーシウ人をとビイズル男メアシ女ウメン親と云
子チルシ書とウウエス目アイ鼻ノチスロマウス手ハアアか

是イイキ男陰ブシカ如陰ア之畫デイ夜ナイ米テイ
酒ラニム茶テエムラア川レハ海シイ井ハヤ口唐チヤイ
天竹まインデヤ日おセツパン米利幹をメリケことアル

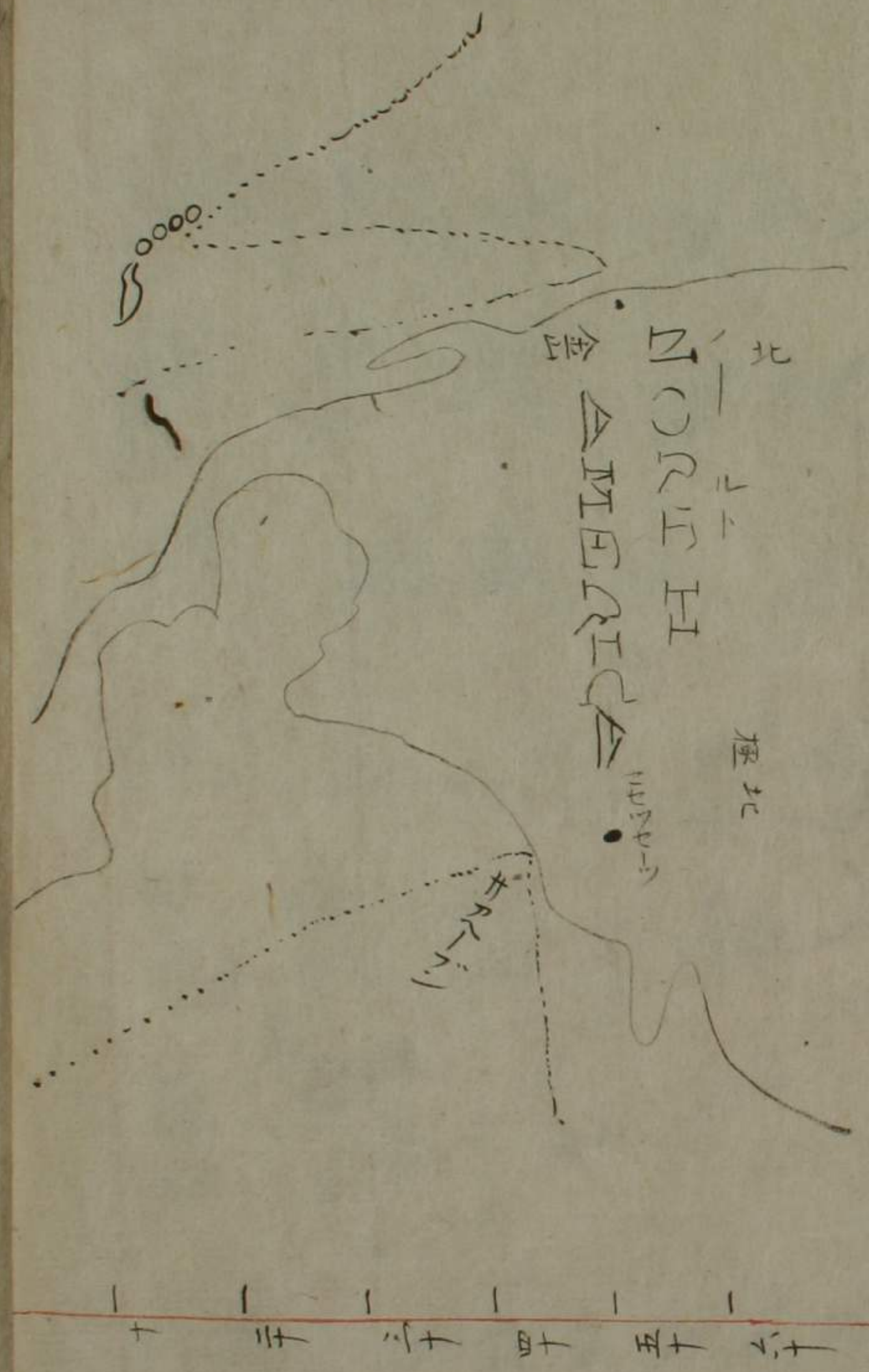
一 烏王府あり天をウミ地レウフ日ニア月マイチ星をホウ
海タイ水ワイ人カチカ男カチカチ女チツイ子酒イスラニ煙草
ハカ籬ハタ男ハ谷をとヘイともヘンともめハイともニイともアル
右より順くお尋有くゆるは悠々十年の談話忽ち一日
取りゆりぬ跡果は夏旦満ちし後甚ふあお月小ゆる

只漂客此中子隨いお紀中い急彼一助あおお成るのハ
 著述をお待中い也

永永五年壬子初冬

吉田文治正巻識

万次郎所持米利幹全國畧字

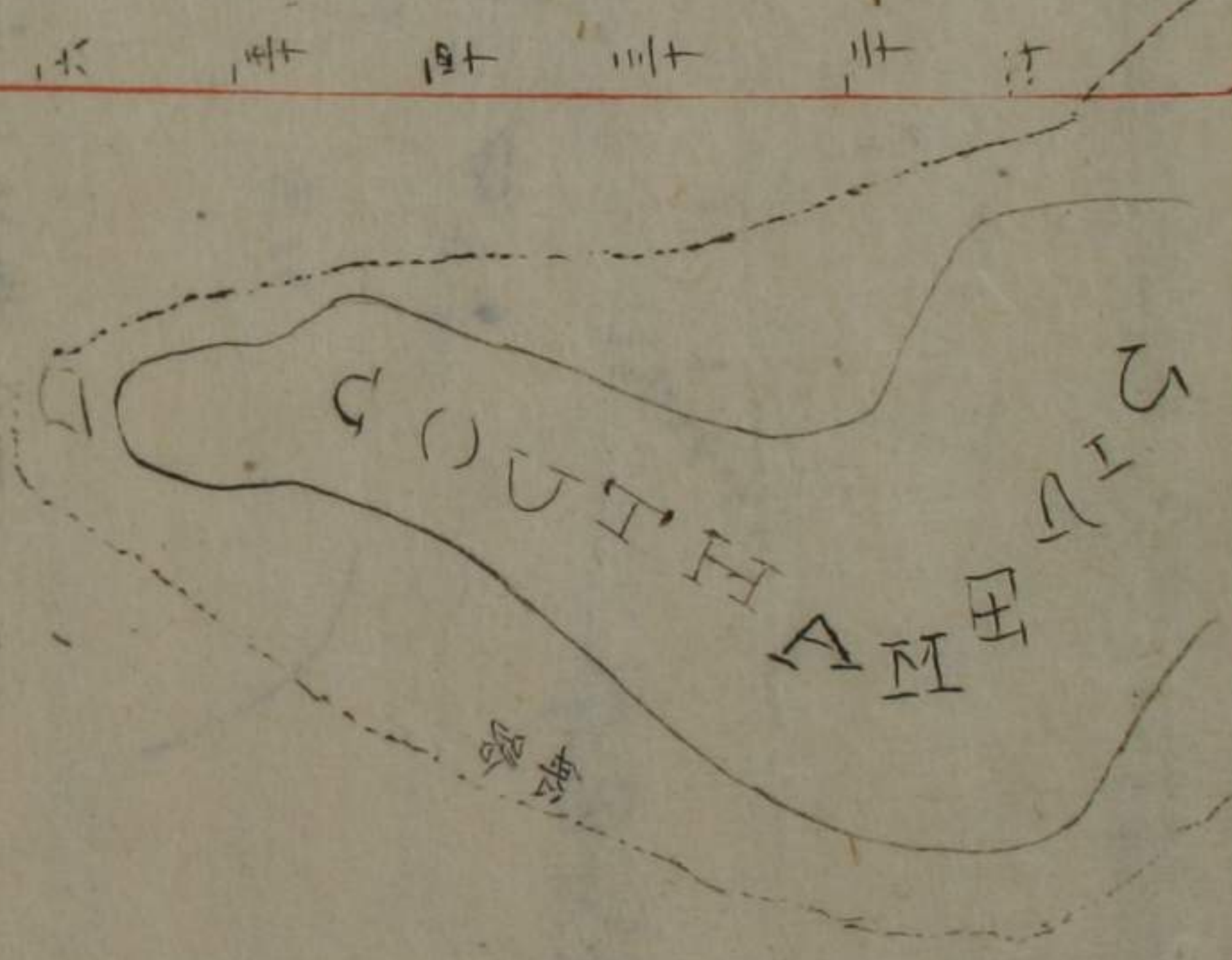


一	ア	セ	シ	ク	イ
二	ア	イ	ナ	イ	エ
三	テ	レ	ム	ル	ク
四	ビ	ト	ア	エ	チ
五	ユ	ヒ	ス	ア	キ
	ウ	ヨ	ア	キ	ク
	ア	ジ			

米利幹通用文字二十六

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
フ	カ	ミ	マ	当	白	セ	ヨ	の	テ
ワ	ウ	テ	ソ	バ	セ	セ	エ	チ	ン
レ	ウ	イ	ウ	ワ	マ	ベ	イ	イ	
	ウ	レ	ボ	イツ	シ	レ	ナ	ウ	

米利幹



卷打斡竹枝

柳影斡聲秋正忙，村々雪尺々來今。豈晨昏
猶自多情思，休道為誰成觀粧。

阿郎不插大洋鞦，貿易金臺在滿剌。獨守
微真又覺玻璃屏裏已三秋。

港口青樓傍水連，今迎莫舶昨蘭舩。芳醅
取醉猶堪厭嬌口，何吹鴉片煙。

周道坦々何厭迂，山沿水達王都國王巡。將

不成隊戴笠跨鞍從一奴。

大正四年二月廿一日

